東北女子大学　紀要　No.58：127 ～ 140　2020

教員養成課程における声楽実技指導の実践研究（２）
―新学習指導要領に基づくルーブリックの活用と検証―

諏　訪　才　子*

A Practical Study of Vocal Skill Instruction in the Teacher Training Course (2)
― Application and testing of the Rubric based on the New Course of Study ―

Saiko SUWA*

Key words : 声楽実技　Vocal Skill
ルーブリック　Rubric
評価アンケート　Evaluation Questionnaire
新学習指導要領　New Course of Study
自学自修　Self-directed learning

１．はじめに

2016 年、中央教育審議会答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』では、新・教育課程で育成を目指す資質・能力として、３つの柱 ①生きて働く「知識・技能」の習得、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養、が明示された。そして、この能力を養うためには、「主体的・対話的で深い学び」が必要とされた。

さらに、大学教育においては、2012 年、中央教育審議会答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』を受け、既に能動的・主体的な学修への質的転換が図られている。また、初等中等教育と高等教育は、各々の教育段階での特質や有効性を生かしたプログラムを構築しながらも、共通の視点をもって連携していくことが求められている。

これらのことを鑑み、前研究（諏訪 2018）では、大学教育における「主体的に考える力」及び新学習指導要領のキーワードである「３つの柱」と「主体的・対話的で深い学び」に基づき、〔教員養成課程における声楽実技のためのルーブリック〕を作成した。

特に、芸術分野における演奏・作品などのパフォーマンスは、個人の感性や音楽経験などに拠るところが大きく、スキルアップに必要な具体的な内容や評価については抽象的で個人差が生じる傾向にある。ルーブリックは、課題や評価規準（観点）、評価尺度（達成レベル）、評価基準（パフォーマンスの具体的な特徴）を明確に示している。このため、定性的評価の可視化・尺度化という点で、芸術の評価に適している。

作成したルーブリックを使用し、少人数の学生に対し、声楽指導を行った。指導では、ルーブリックの内容を細分化した評価アンケートを用いた。その結果、このルーブリックと評価アンケートを使用した教育実践は、有効であることが明らかになった。

そこで、本研究では、少人数の学生に対する指導の分析結果を一斉授業に反映させた。同一の、〔教員養成課程における声楽実技のためのルーブリック〕と評価アンケートを、さらに声楽の一斉授業で使用し、実技指導を行い、作成したルーブリックの活用方法と有効性を検証することを目的とした。

＊東北女子大学

２．声楽実技指導の実践

２.１　声楽実技指導の実施（対象と期間）

声楽実技指導の対象者は、2018 年度に本学で開講された科目〔音楽表現Ⅱ（声楽）〕を受講した児童学科３年生 50 名である。声楽指導は、2018 年 11・12 月に計５回実施した。

２.２　声楽実技指導の実施（方法）

課題曲は、イタリア歌曲「Nina」(Giovanni Battista Pergolesi 作曲）である。第１回目の授業の冒頭で、学生に対し、全５回の授業で「Nina」の歌唱を仕上げ、最終回の第５回には、演奏会形式により暗譜で独唱発表を行うことを伝える。また、声楽実技のためのルーブリック評価表（表１）を学生に提示し、評価観点（学修規準）と評価尺度（学修到達レベル)、評価基準について説明する。５回の授業は、このルーブリック評価表に基づいて実施し、各回の終了時に、評価アンケート（表２）を用いて振り返りを行うことを説明する。なお、第５回には、学生は自己評価に加え、他学生に対する評価を行う。また教員による個人評価を行う。さらに、学生は毎回、６項目についてのレッスン記録（表３）をとる。

２.３　声楽実技のためのルーブリックと評価アンケート

「教員養成課程における声楽実技指導の実践研究～新学習指導要領に基づくルーブリックの作成と検証～」(諏訪 2018）において作成及び使用したものと同一の声楽実技のためのルーブリック（表１）と評価アンケート（表２)、声楽レッスン記録（表３）を使用する。ルーブリックの４観点とアンケート項目の対応表も同じである（表４)。これらの詳細については、本学「東北女子大学紀要 57」で述べている。

２.４　声楽実技指導の概要

第１回

１．発声のためのウォーミングアップを行う。
　①簡易な柔軟体操を行う。(以下、〔柔軟体操〕とする。)
　②呼吸体操及び基本的な呼吸トレーニングを行う。(以下、〔呼吸トレーニング〕とする。)
２．発声練習
　①５母音に子音ｍを付けた「マ」「メ」「ミ」「モ」「ム」により、“あくび、驚き、笑い”の態勢を加えた頭声発声を行う。(以下、〔発声練習①〕とする。)
　②５度音程の分散和音による音形を「ミ」で行う。(以下、〔発声練習②〕とする。)
　③１オクターブの分散和音による音形を「ミ」で行う。(以下、〔発声練習③〕とする。)
３．歌唱曲の練習
　①「マ」による母音唱法を行う。(以下、〔歌唱曲・母音唱法①〕とする。)課題曲の譜読みを、音程・リズム等を中心に、教員によるピアノ単音補助を付けて行う。
　②頭声発声により歌詞の読みを行う。(以下、〔歌唱曲・読み②〕とする。)

第２回

１．ウォーミングアップ〔柔軟体操、呼吸トレーニング〕を行う。
２．発声練習〔発声練習①、②、③〕を行う。
３．歌唱曲の練習
　①〔歌唱曲・母音唱法①〕を行う。
　②〔歌唱曲・読み②〕を行う。
　③歌詞により通して歌う。(以下、〔歌唱曲・歌詞③〕とする。)
４．歌唱曲の練習〔歌唱曲・母音唱法①、読み②、歌詞③〕のグループ練習を行う。

第３回

１．ウォーミングアップ〔柔軟体操、呼吸トレーニング〕を行う。
２．発声練習〔発声練習①、②、③〕を行う。
３．歌唱曲の練習〔歌唱曲・母音唱法①、読み②、歌詞③〕を行う。
４．歌唱曲の練習〔歌唱曲・母音唱法①〕のグループ練習及びグループ発表を行う。

第４回

卒業研究において声楽演奏を予定している４年

表１　声楽実技のためのルーブリック

観点		A 大変素晴らしい	B 十分できる	C まあまあできる	D 一部はできる	E 初歩的な基礎学習ができる
知識	読譜力（音程・リズム・拍子感等）	音楽的要素を理解して、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことができ、かつ音楽性を備えている。	音楽的要素を理解して、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことが十分できる。	音楽的要素を理解して、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことが概ねできる。	音楽的要素を理解して、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことが、部分的にできる。	音楽的要素を理解して、ピアノの単音補助をつけて、正確な音程・リズム・拍子感で歌うことができる。
	楽曲の解釈（音楽様式の理解・歌詞の理解）	音楽様式と歌詞の内容を深く理解して、説明することができる。	音楽様式と歌詞の内容を十分理解している。	音楽様式と歌詞の内容を概ね理解している。	音楽様式と歌詞の内容を部分的に理解している。	音楽様式や歌詞の内容について、参考資料を基に調べることができる。
技能	発声（姿勢・呼吸・共鳴等）	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて深く理解して、説明を加えて、音楽性豊かに実践することができる。	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて十分理解して、実践することができる。	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて概ね理解して、実践することができる。	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて、部分的に理解して、実践することができる。	姿勢・呼吸法・共鳴など、発声法のメカニズムについて、参考資料を基に調べることができる。
	歌詞の発音（母音・子音等）	日本語や外国語による歌詞を、自然に美しく、正しい発音・ディクションで歌うことができる。	日本語や外国語による歌詞を、正しい発音・ディクションで歌うことが十分できる。	日本語や外国語による歌詞を、正しい発音・ディクションで歌うことが概ねできる。	日本語や外国語による歌詞を、正しい発音・ディクションで歌うことが部分的にできる。	日本語や外国語による歌詞の発音・ディクションについて、参考資料や音源を基に声に出して読むことができる。
表現	演奏表現（音楽的表現・歌詞の表現）	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、創意工夫して、大変表情豊かに表現することができる。	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、創意工夫して、十分表現することができる。	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、概ね表現することができる。	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、部分的に表現することができる。	旋律のもつ音楽性、歌詞の内容・心情を、参考資料や音源を基に理解することができる。
	完成度（暗譜・伴奏合わせ）	暗譜は体得されていて、歌とピアノ伴奏の音楽性も非常に一体化した、大変完成度の高い表現ができる。	暗譜していて、歌とピアノ伴奏の音楽性が一致した十分完成した表現ができる。	暗譜、歌とピアノ伴奏の音楽性が一致した表現が概ねできる。	暗譜、歌とピアノ伴奏の音楽性が一致した表現が部分的にできる。	暗譜、歌とピアノ伴奏の音楽的な合わせに取り組むことができる。
	ステージマナー	大変丁寧で、美しく品格のあるステージマナーを身につけている。	丁寧で、基本的なステージマナーを十分身につけている。	基本的なステージマナーを概ね身につけている。	基本的なステージマナーを部分的に身につけている。	基本的なステージマナーを理解することができる。
主体的に取り組む態度		自ら歌唱曲を選出し、知識・技術・表現などの課題を解決しながら、音楽的に大変豊かに表現することができる。	自ら歌唱曲を選出し、知識・技術・表現などの課題を解決しながら、音楽的に表現することが十分できる。	指定された曲の中から歌唱曲を選出し、知識・技術・表現などの課題を解決しようとしながら、音楽的に歌唱することが概ねできる。	指定された曲の中から歌唱曲を選出し、知識・技術・表現などの課題を解決しようとしながら歌唱することが部分的にできる。	指定された曲の中から歌唱曲を選出し、知識・技術・表現などの初歩的な課題に取り組むことができる。
総合評価		印象に残る大変魅力的な演奏ができる。	十分に良い演奏ができる。	基本的な歌唱が概ねできる。	基本的な歌唱が部分的にできる。	歌唱の初歩的な学習ができる。

表２　評価アンケート

声楽レッスン アンケート

5…大変素晴らしい　4…十分できる　3…まあまあできる
2…一部はできる　1…初歩的な段階である

１．音楽的要素（音程・リズム・拍子感など）を、正確に歌うことができる。
２．音楽様式や歌詞の内容を理解している。
３．自然な良い姿勢、美しい立ち姿で歌うことができる。
４．呼吸法、ブレスは、適切にできる。
５．口の開き方や顔の表情など、発声上の留意ポイントは適切にできる。
６．全体に、自然で無理のない美しい響きのある発声ができる。
７．全体に、声量は豊かである。（音域による違いも判断基準に含める。）
８．全体に、よく通る響きのある声である。（音域による違いも判断基準に含める。）
９．歌詞の発音は、正しくかつ明瞭である。
１０．フレージングなどメロディーの音楽的表現、また歌詞の内容を表現することができる。
１１．暗譜、また伴奏との合わせは十分にできる。
１２．ステージでのマナーは適切にできる。
１３．総合的に、印象に残る魅力的な演奏ができる。

表３　声楽レッスン記録

声楽レッスン記録・レポート

１．レッスン日までの練習記録
２．今回のレッスンで分かったこと、体感したポイント
３．できるようになったこと
４．レッスンでのキーワード
５．歌唱曲での具体的ポイント
６．レッスンを受けての感想

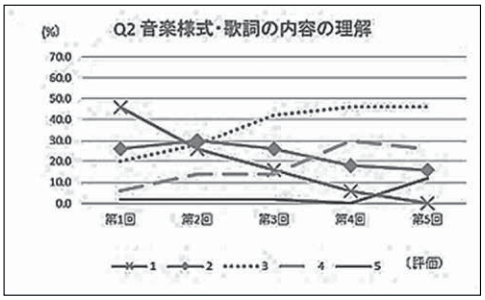
表４　４観点とアンケート項目の対応表

観点	項目
知識	１、２
技能	３、４、５、６、７、８、９
表現	10、11、12
主体的に学習に取り組む態度	知識・技能・表現の修得過程に含まれているため、特に設定しない。

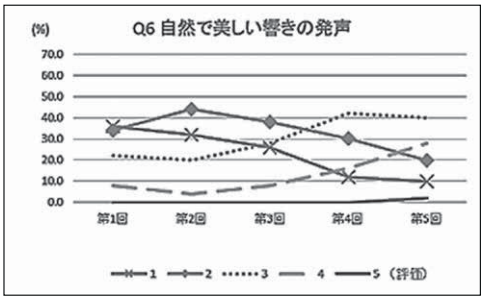
生の学生（以下、〔４年学生〕とする。）が、授業に参加する。４年学生は、既に、同一のルーブリックとアンケート、レッスン記録を使用した集中レッスンを受け、その最終回では、「Nina」の独唱発表を行った。

１．ウォーミングアップ〔柔軟体操、呼吸トレーニング〕を行う。
２．発声練習〔発声練習①、②、③〕を行う。
３．歌唱曲の練習〔歌唱曲・母音唱法①、読み②、歌詞③〕を行う。４年学生が「Nina」の演奏発表を行う。
４．歌唱曲の練習〔歌唱曲・歌詞③〕のグループ練習及びグループ発表を行う。
５．教員と４年学生が、歌唱曲の練習〔歌唱曲・

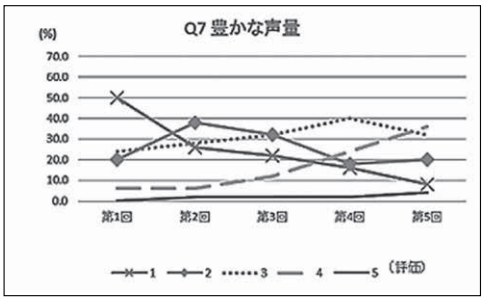
〔Q2. 音楽様式や歌詞の内容を理解している。〕



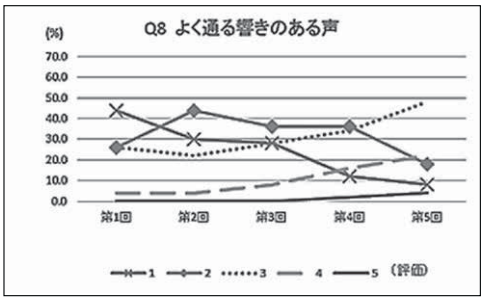
〔Q6. 全体に、自然で無理のない美しい響きのある発声ができる。〕



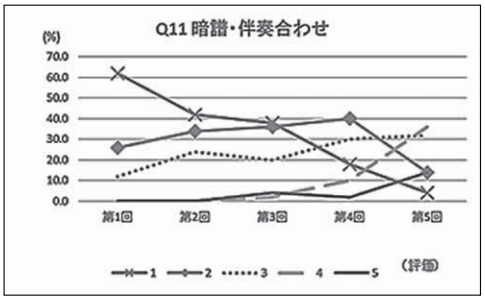
〔Q7. 全体に、声量は豊かである。（音域による違いも判断基準に含める。〕



〔Q8. 全体に、よく通る響きのある声である。（音域による違いも判断基準に含める。〕



〔Q11. 暗譜、また伴奏との合わせは十分にできる。〕



〔Q13. 総合的に、印象に残る魅力的な演奏ができる。〕

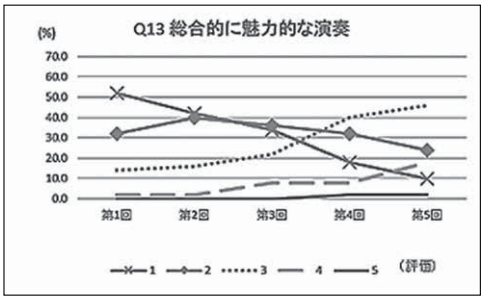


図１　Q1～Q13 別の第１回から第５回までの５段階評価の割合

歌詞③〕のグループ及び個別指導を行う。

第５回

１．ウォーミングアップ〔柔軟体操、呼吸トレーニング〕、２．発声練習〔発声練習①、②、③〕、３．歌唱曲の練習〔歌唱曲・母音唱法①、読み②、歌詞③〕を、各自、個人練習した後、演奏会形式により「Nina」の暗譜・独唱発表を行う（学生の伴奏による）。自己評価とともに、同じ評価アンケートを用いて他の学生への評価も行う。

３．結果と考察

学生による評価アンケート（１～５の５段階）

の結果を分析する。５段階評価の〈4〉と〈5〉を“できる”肯定的評価、〈3〉を“どちらでもない”、〈1〉と〈2〉を“できない”否定的評価にまとめる。また、以下、〈4〉と〈5〉の合計を〈4、5〉、〈1〉と〈2〉の合計を〈1、2〉と表す。

３.１　各項目別の第１回～第５回における評価の比較

学生による第１回から第５回の 13 項目別の５段階評価の人数の割合（表５）を、折れ線グラフに表す（図１）。ここでは、Q2、Q6、Q7、Q8、Q11、Q13 について載せる。以下、13 項目は、Q1～Q13 として表す。

図１のグラフからも読み取れるように、全項目が、多少の上行下行がありながらも、最終回の第５回には、評価〈4、5〉と〈3〉の割合が大きく増加し、評価〈1、2〉が著しく減少した。第２回から第５回の４回の授業における、Q1～Q13 各項目数の計 52 のうち、評価〈4、5〉の割合が減少した、または評価〈1、2〉の割合が増加した回と項目を抽出し、分析する。

- 〔Q1 音程・リズム〕の第３回において、評価〈1、2〉が 4.0 ポイント増加した①。
- 〔Q4 呼吸・ブレス〕の第２回において、評価〈4、5〉が 4.0 ポイント減少した②。第５回において、評価〈1、2〉が 2.0 ポイント増加した③。
- 〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕の第２回において、評価〈1、2〉が 4.0 ポイント増加し、評価〈4、5〉が 6.0 ポイント減少した④。
- 〔Q6 自然で美しい響きの発声〕の第２回において、評価〈1、2〉が 6.0 ポイント増加し、評価〈4、5〉が 4.0 ポイント減少した⑤。
- 〔Q8 よく通る響きのある声〕の第２回において、評価〈1、2〉が 4.0 ポイント増加した⑥。
- 〔Q9 歌詞の発音〕の第２回において、評価〈4、5〉が 2.0 ポイント減少した⑦。
- 〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容表現〕の第２回において、評価〈1、2〉が 2.0 ポイント増加した⑧。

②、④、⑤、⑥、⑦、⑧は、いずれも学修の初期段階の第２回であり、グループ練習を取り入れている。これにより学生は、互いに教え合い、他の学生の歌を聴き自分の歌と比較することにより、自分の歌唱について客観的に判断できるようになったと考えられる。①については、第３回でのグループ発表により、学生は、自分の音程・リズムの不安定、未修得を把握することができたと考えられる。さらに、発表を聴いた他の学生から、改善点を含むアドバイスを得ることができた。③については、同様に第５回の最終独唱発表により、呼吸・ブレスの体得が不足していることを認識したと考えられる。また、学生は、発表により、自己評価と自分の歌唱を基にした他学生への評

表５　Q1 ～ Q13 別の第１回から第５回までの評価の割合

Q2（%）	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
1	46.0	26.0	16.0	6.0	0.0
2	26.0	30.0	26.0	18.0	16.0
3	20.0	28.0	42.0	46.0	46.0
4	6.0	14.0	14.0	30.0	26.0
5	2.0	2.0	2.0	0.0	12.0

Q6（%）	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
1	36.0	32.0	26.0	12.0	10.0
2	34.0	44.0	38.0	30.0	20.0
3	22.0	20.0	28.0	42.0	40.0
4	8.0	4.0	8.0	16.0	28.0
5	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0

Q7（%）	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
1	50.0	26.0	22.0	16.0	8.0
2	20.0	38.0	32.0	18.0	20.0
3	24.0	28.0	32.0	40.0	32.0
4	6.0	6.0	12.0	24.0	36.0
5	0.0	2.0	2.0	2.0	4.0

Q8（%）	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
1	44.0	30.0	28.0	12.0	8.0
2	26.0	44.0	36.0	36.0	18.0
3	26.0	22.0	28.0	34.0	48.0
4	4.0	4.0	8.0	16.0	22.0
5	0.0	0.0	0.0	2.0	4.0

Q11（%）	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
1	62.0	42.0	38.0	18.0	4.0
2	26.0	34.0	36.0	40.0	14.0
3	12.0	24.0	20.0	30.0	32.0
4	0.0	0.0	2.0	10.0	36.0
5	0.0	0.0	4.0	2.0	14.0

Q13（%）	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
1	52.0	42.0	34.0	18.0	10.0
2	32.0	40.0	36.0	32.0	24.0
3	14.0	16.0	22.0	40.0	46.0
4	2.0	2.0	8.0	8.0	18.0
5	0.0	0.0	0.0	2.0	2.0

価、二つの方向から評価することにより、知識・技能を定着させながら、指導法を身につけることができたと言える。この７項目での８回を除き、他は全て回を重ねるごとに自己評価値が高くなっている。

重要なことは、以上の学修がルーブリックと評価アンケートに基づいて行われたということである。授業では、課題に対して明確に示され、学生・教員ともに共有された評価規準・尺度・基準のもとに、適切な自己評価や相互評価、協働が行われたと考えられる。これにより、学修が深まり、フィードバックを効果的に行うことができたと言える。

３.２　第１回～第５回、各回における項目別評価の比較

第１回から第５回の全項目について、評価〈4、5〉、〈3〉、〈1、2〉、それぞれの割合の高い順に項目を比較する。表の一番下に、総合評価〔Q13 総合的に魅力的な演奏〕を設定する。肯定的評価〈4、5〉に着目して分析する（表６）。評価〈1、2〉の割合については、概ね、評価〈4、5〉の順位結果と反比例するため、評価〈4、5〉の分析結果に置き換える。

（１）表５、表６から、学生による第１回から第５回の総合評価〔Q13 総合的に魅力的な演奏〕について、評価〈4、5〉、評価〈3〉、評価〈1、2〉、それぞれの割合を比較する。

総合評価に対する評価〈4、5〉の割合は、第１回から第５回にかけて、2.0％から 20.0％に大きく上昇した。評価〈3〉は、14.0％から 46.0％に上昇し、評価〈1、2〉は、84.0％から 34.2％へと著しく減少した。この評価〈1、2〉から評価〈3〉と評価〈4、5〉への数値の変動は、第３回から第５回に顕著に見られた。

以上のことから、総合評価は、第１回から第５回にかけて、“できる”肯定的評価へと大きく数値が上がったことが分かる。この上昇の変化は第３回から第５回に顕著に表れたことから、第３回、第４回にグループ発表を行ったこと、さらに第５回の独唱演奏発表という最終目標に向けて、後半、学修が急速に深化したと考えられる。ルーブリックによる学修全体の目標の明示と学修の最終段階での学修成果の発表というより具体的な目標が、学生のモチベーションを高め、学修の動機づけとなったことが推測される。

（２）学生による第１回から第５回、各回における評価〈4、5〉の割合の高い項目について比較する。

表６から、第１回から第５回まで共通して、上位を占めている項目は、〔Q3 姿勢〕、〔Q12 ステージマナー〕、〔Q2 音楽様式・歌詞の内容の理解〕、〔Q7 豊かな声量〕である。先の３項目は、比較的に、学生が自学により達成することが容易な項目である。また、ルーブリックのステップ１から５に、短時間で到達することが可能な学修内容である。さらに、発声に関する項目〔Q7 豊かな声量〕が入っていることから、学生は、声が良く出ていると判断していることが伺える。

この他に上位項目として、第１回から第４回では、〔Q1 音程・リズム〕、〔Q4 呼吸・ブレス〕、〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕が挙げられ、第５回では、〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕が〔Q12 ステージマナー〕に次いで第２位となっている。第１回の授業で行った音程・リズムを中心とした譜読みの技能が第４回にかけて定着してきたと考えられる。また、学生は、ブレスや口の開き方など発声の具体的なポイントに留意して取り組んでいることが分かる。これは、第３回、第４回のグループ発表では、特に意識した内容である。第５回では、演奏会形式による独唱発表を行った。これらのことから、上位項目には、各回での授業内容が顕著に反映されていることが分かる。

さらに、歌唱の基礎として中心的に行われる必須技能の発声、声に関する項目〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕、〔Q6 自然で美しい響きの発声〕、〔Q7 豊かな声量〕、〔Q8 よく通る響きのある声〕のいくつかが３～５位に入っていることも同様の理由による。また学生は、発声を重要だと考えていることが推測できる。しかし、一方で

表６　学生による第１回から第５回における評価〈４、５〉の割合の高い項目順、％

4,5	1回		2回		3回		4回		5回	
順位 1	〔Q3 姿勢〕	22.0	〔Q3 姿勢〕	32.0	〔Q3 姿勢〕 〔Q12 ステージマナー〕	34.0	〔Q12 ステージマナー〕	44.0	〔Q12 ステージマナー〕	52.0
2	〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕 〔Q12 ステージマナー〕	12.0	〔Q2 音楽様式・歌詞の内容の理解〕 〔Q12 ステージマナー〕	16.0	〔Q2 音楽様式・歌詞の内容の理解〕	16.0	〔Q3 姿勢〕	42.0	〔Q1 暗譜・伴奏合わせ〕	50.0
3	〔Q4 呼吸・ブレス〕	10.0	〔Q1 音程・リズム〕 〔Q7 豊かな声量〕	8.0	〔Q7 豊かな声量〕	14.0	〔Q2 音楽様式・歌詞の内容の理解〕	30.0	〔Q3 姿勢〕	44.0
4	〔Q2 音楽様式・歌詞の内容の理解〕 〔Q6 自然で美しい響きの発声〕	8.0	〔Q4 呼吸・ブレス〕 〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕	6.0	〔Q4 呼吸・ブレス〕	12.0	〔Q4 呼吸・ブレス〕 〔Q7 豊かな声量〕	26.0	〔Q7 豊かな声量〕	40.0
5	〔Q1 音程・リズム〕 〔Q7 豊かな声量〕	6.0	〔Q6 自然で美しい響きの発声〕 〔Q8 よく通る響きのある声〕	4.0	〔Q1 音程・リズム〕 〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕 〔Q6 自然で美しい響きの発声〕 〔Q8 よく通る響きのある声〕 〔Q9 歌詞の発音〕	8.0	〔Q1 音程・リズム〕 〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕 〔Q8 よく通る響きのある声〕	18.0	〔Q2 音楽様式・歌詞の内容の理解〕	38.0
6	〔Q8 よく通る響きのある声〕	4.0	〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕	2.0	〔Q1 暗譜・伴奏合わせ〕	6.0	〔Q6 自然で美しい響きの発声〕	16.0	〔Q4 呼吸・ブレス〕	34.0
7	〔Q9 歌詞の発音〕	2.0	〔Q9 歌詞の発音〕 〔Q1 暗譜・伴奏合わせ〕	0.0	〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕	2.0	〔Q9 歌詞の発音〕 〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕	14.0	〔Q1 音程・リズム〕 〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕 〔Q6 自然で美しい響きの発声〕	30.0
8	〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕 〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕	0.0					〔Q1 暗譜・伴奏合わせ〕	12.0	〔Q8 よく通る響きのある声〕	26.0
9									〔Q9 歌詞の発音〕 〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕	22.0
総合評価		2.0		2.0		8.0		10.0		20.0

表７　教員による第５回における評価〈４、５〉の割合の高い項目順、％

4,5	5回	
順位1	〔Q3　姿勢〕	65.3
2	〔Q9　歌詞の発音〕	59.2
	〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕	
	〔Q12 ステージマナー〕	
3	〔Q4　呼吸・ブレス〕	48.9
4	〔Q1　音程・リズム〕	40.8
	〔Q2　音楽様式・歌詞の内容の理解〕	
5	〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕	28.0
6	〔Q7　豊かな声量〕	24.5
7	〔Q5　口の開き方など発声のポイント〕	22.4
8	〔Q6　自然で美しい響きの発声〕	14.3
	〔Q8　よく通る響きのある声〕	
総合評価		20.4

は、これらの項目は、上位と下位の両方に渡っていることから、発声全般の技能については、課題があると言える。

下位には、〔Q9 歌詞の発音〕、〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕、〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕（第５回を除く）がある。これらの項目は、発声を応用した学修の後半での表現や仕上げ段階の項目であるため、学修の深化や達成に時間がかかることから妥当性があると言える。また、学生は、イタリア語の歌詞の発音に苦戦していることが伺える。

比較的に自学により達成することが容易な項目、授業内容に関する項目、そして、歌唱の必須技能である発声に関する項目のいくつか、これらが、学生が特に達成できたと判断している内容であると考えられる。

（３）教員による、第５回における評価〈4、5〉の割合の高い項目について比較する（表７）。

上位には、学生と共通して〔Q3 姿勢〕、〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕、〔Q12 ステージマナー〕、〔Q2 音楽様式・歌詞の内容の理解〕が入っている。これらは、同様に、自学により修得が容易な内容である。下位項目は、〔Q7 豊かな声量〕、〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕、〔Q6 自然で美しい響きの発声〕、〔Q8 よく通る響きのある声〕であることから、教員は、学生に対して、さらなる発声の技能の向上を求めていることが分かる。また、学生・教員ともに発声全般の技能の修得には不足があると認識していると考えられる。以上のことから、学生と教員の評価は、ほぼ一致していると言える。

（４）学生と教員による、第５回の評価〈4、5〉の割合を比較する。

表６・７より、教員評価において上位にあり、かつ学生評価より高い順位の項目は、〔Q9 歌詞の発音〕、〔Q4 呼吸・ブレス〕、〔Q1 音程・リズム〕、〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕である。特に〔Q9 歌詞の発音〕と〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕は、教員評価が上位５位以内であるのに対し、学生は最下位の９位であった。比較すると、教員評価では、〔Q9 歌詞の発音〕、〔Q3 姿勢〕、〔Q4 呼吸・ブレス〕、〔Q1 音程・リズム〕が、それぞれ 37.2 ポイント、21.3 ポイント、14.9 ポイント、10.8 ポイント、学生評価を上回る数値となっている。一方、学生評価が教員より高い項目は、〔Q6 自然

で美しい響きの発声〕、〔Q7 豊かな声量〕、〔Q8 よく通る響きのある声〕で、それぞれ15.7ポイント、15.5ポイント、11.8ポイント、教員をやや上回る数値となっている。発声、声に関する評価が高いことが特徴である。順位と割合が大きく異なる〔Q9 歌詞の発音〕、〔Q3 姿勢〕、そして、やや異なる〔Q4 呼吸・ブレス〕、〔Q6 自然で美しい響きの発声〕、〔Q7 豊かな声量〕、〔Q8 よく通る響きのある声〕の項目以外は、〔Q13 総合的に魅力的な演奏〕を含め、ほぼ同じ評価であると言える。

これらのことから、最終回の独唱演奏発表において、教員の評価に反し、学生は、歌詞の発音に自信がなかったことが分かる。他に、姿勢や呼吸、音程・リズムについても学修の不足を把握した学生がいることが伺える。学生による自己評価の分析結果から、教員は、授業での学生の歌唱からだけでは判断することのできない課題や傾向を把握することができた。また、発声に関して、教員評価は学生より低いことが分かる。しかし、学生と教員の評価は、全体的には、総合評価を含め概ね一致していると考えられる。

ルーブリックとその内容を細分化した評価アンケートを使用した授業では、教員と学生が同じ目標と尺度をもって学修を進めることができ、このことは、一斉授業において、学修を効果的に進めるための重要な要素であると言える。

３.３　各項目における“できる”肯定的評価〈４、５〉の割合を満足率とし、CS 分析を行う。

CS 分析は、各項目別の満足度と重要度から、改善項目の優先度を把握し、改善施策の指針とする分析方法である。総合評価〔Q13 総合的に魅力的な演奏〕における満足度を総合満足度とし、各項目が総合評価に与える影響について相関係数を求め重要率とする。満足率と重要率は、偏差値に変換し、満足度、重要度とする。偏差値 t は、以下の数式で求められる。（それぞれの平均を q、標準偏差を s、得点を m とする。）

$$t = \frac{m-q}{s} \times 10 + 50$$

満足度、重要度は、次の式で計算する。

満足度＝（満足率－満足率の平均値）÷標準偏差値×10＋50

重要度＝（重要率－重要率の平均値）÷標準偏差値×10＋50

項目ごとの満足度を縦軸（y 軸）、重要度を横軸（x 軸）として、２次元座標にプロットし、これを偏差値50の境界線により、４象限に分割する。右下の象限は、重点改善分野で、重要度が高いにもかかわらず満足度が低く、総合満足度を上げるために最優先で改善しなければならない。右上の象限は、重点維持分野で、重要度、満足度ともに高く、引き続き満足度を維持する必要がある。左上の象限は、維持分野で、満足度は高いが、重要度が低く、現状維持の内容となる。左下の象限は、改善分野で、重要度、満足度ともに低く、総合評価への影響は少ないが、満足度が低いため、重点改善分野に次いで改善を要する内容である。また、改善の必要性は、改善度として、数値化することができる。

満足度、重要度、改善度を表８に示す。ここでは、第５回について載せる。第５回の学生と教員の改善度順位を表９に示す。改善度の算出には、南（2007）の方法を参考にした。ここでは改善度を CS グラフと合わせるため、南（2007）の方法の10倍の値とした。第５回の学生と教員による評価の CS グラフを図２に示す。また、CS グラフの各分野を図３に示す。

（１）総合評価と相関が高い項目を抽出する。

学生による第１回では、〔Q9 歌詞の発音〕、〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕、第２回は、〔Q8 よく通る響きのある声〕、〔Q9 歌詞の発音〕、〔Q12 ステージマナー〕、第３回は、〔Q8 よく通る響きのある声〕、〔Q5 口の開き方など発声のポイント〕、〔Q6 自然で美しい響きの発声〕、第４回は、〔Q8 よく通る響きのある声〕、〔Q1 音程・リズム〕、〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕、〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕、第５回は、〔Q6 自然で美しい響きの発声〕、〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕などである。教

表８　学生と教員による自己評価の満足度、重要度、改善度

学生　第５回

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12
満足率	0.3	0.38	0.44	0.34	0.3	0.3	0.4	0.26	0.22	0.22	0.5	0.52
重要率	0.67	0.29	0.38	0.71	0.59	0.85	0.66	0.61	0.69	0.73	0.67	0.53
重要度	53.47	28.66	34.60	55.87	48.66	65.02	52.80	49.93	55.08	57.61	53.62	44.66
満足度	45.22	53.13	59.07	49.18	45.22	45.22	55.11	41.26	37.30	37.30	65.01	66.98
改善度	8.25	−24.48	−24.47	6.70	3.44	19.81	−2.31	8.67	17.78	20.31	−11.39	−22.32
改善度順位	5	12	11	6	7	2	8	4	3	1	9	10

教員　第５回

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12
満足率	0.41	0.41	0.65	0.49	0.22	0.14	0.24	0.14	0.59	0.29	0.59	0.59
重要率	0.79	0.78	0.78	0.75	0.75	0.86	0.90	0.89	0.70	0.83	0.64	0.64
重要度	52.13	50.46	50.34	46.58	46.77	60.03	64.24	62.99	41.30	56.32	34.34	34.50
満足度	50.55	50.55	63.68	54.92	40.70	36.32	41.79	36.32	60.39	43.98	60.39	60.39
改善度	1.58	−0.09	−13.34	−8.34	6.07	23.71	22.45	26.66	−19.10	12.33	−26.05	−25.89
改善度順位	6	7	9	8	5	2	3	1	10	4	12	11

表９　第５回における学生と教員の改善度順位

学生

項目	改善度	改善度順位
Ｑ１０	20.31	1
Ｑ６	19.81	2
Ｑ９	17.78	3
Ｑ８	8.67	4
Ｑ１	8.25	5
Ｑ４	6.70	6
Ｑ５	3.44	7
Ｑ７	-2.31	8
Ｑ１１	-11.39	9
Ｑ１２	-22.32	10
Ｑ３	-24.47	11
Ｑ２	-24.48	12

教員

項目	改善度	改善度順位
Ｑ８	26.66	1
Ｑ６	23.71	2
Ｑ７	22.45	3
Ｑ１０	12.33	4
Ｑ５	6.07	5
Ｑ１	1.58	6
Ｑ２	-0.09	7
Ｑ４	-8.34	8
Ｑ３	-13.34	9
Ｑ９	-19.10	10
Ｑ１２	-25.89	11
Ｑ１１	-26.05	12

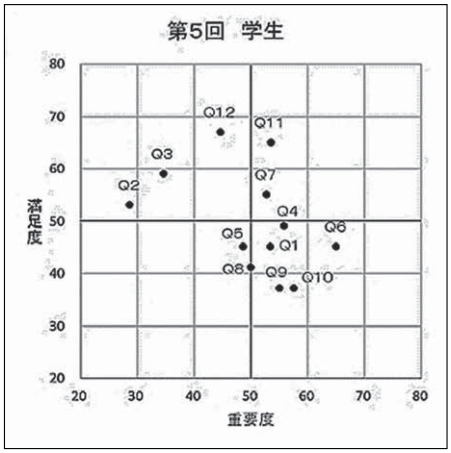
員による第５回では、〔Q7 豊かな声量〕、〔Q8 よく通る響きのある声〕、〔Q6 自然で美しい響きの発声〕、〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕が挙げられる。これらの項目は、総合評価に影響を与え、かつ学生、教員それぞれが重要視している内容であると考えられる。

（２）第５回の改善度の順位について、表６と表８を比較する。

学生、教員、それぞれの総合評価に影響を与え、また学生、教員が重要視している項目は、評価〈4、5〉の割合の下位項目であると推測できる。さらに、これらの項目は、総合評価と相関が高く、改善度上位項目であることが示されている。

（３）第５回の学生と教員による評価の CS グラフを比較する。

CS グラフと表９から、学生では、重点維持分野が、〔Q7 豊かな声量〕、〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕、維持分野は、〔Q2 音楽様式・歌詞の内容の理解〕、〔Q3 姿勢〕、〔Q12 ステージマナー〕、重点改善分野は、〔Q10 メロディーの音楽的表現・歌詞の内容の表現〕、〔Q6 自然で美しい響きの発声〕、〔Q9 歌詞の発音〕である。教員では、維持分野として、〔Q9 歌詞の発音〕、〔Q11 暗譜・伴奏合わせ〕、〔Q12 ステージマナー〕、〔Q4 呼吸・



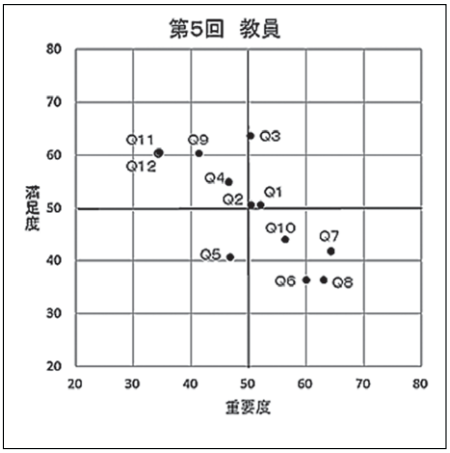


図２　第５回学生と教員による評価のＣＳグラフ

ブレス〕が挙げられ、〔Q6 自然で美しい響きの発声〕、〔Q7 豊かな声量〕、〔Q8 よく通る響きのある声〕が重点改善分野である。

第５回の独唱発表では、重点維持分野の項目から、学生は、声量と暗譜・伴奏合わせを重要視し、かつ自己評価が高いことが分かる。これらの項目には、授業内容も反映されていることが推測できる。また、教員が、今後さらに伸ばしていきたい内容である。維持分野には、比較的に自学により到達しやすい項目、さらに重点改善分野には、イタリア語による歌詞の発音や発声に関わる他の項目など、技能の修得に学修の回数や時間のかかる内容、また、技能を活用した学修の後半での表現に関わる内容が入っている。この重点改善分野の項目が、総合評価に影響を与え、学生が重要視している学修内容であると言える。教員では、独唱発表において達成されているべき項目、また、学生同様に、自学により達成し易い項目が、維持分野に入っている。さらに重点改善分野には、発声に関する３つの全ての項目が入っている。これらが、総合評価に影響を与え、教員が重要視し、かつ改善度の高い学修内容であると言える。なお、今回は、イタリア歌曲の譜読みから暗譜独唱発表までを、５回の授業で仕上げた。学生、教員ともに、改善度を下げるには、課題曲に対する授業回

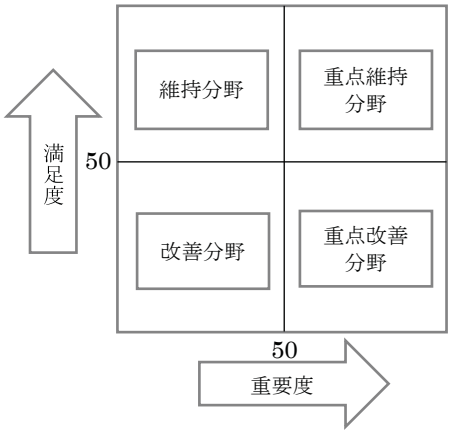


図３　CSグラフ　各分野

数、各自の練習時間・回数を増やすことが、第一の改善策に挙げられる。

以上のことから、CS 分析の結果からは、３.２（２）、（３）の考察と一致する結論が得られた。CS 分析については、改善という視点からのみ見るのではなく、評価〈4、5〉の上位、即ち、重点維持分野や維持分野にも焦点を当てて、その学修内容をさらに伸ばすことにより、学生の項目満足度や総合満足度が高まり、教育効果が上がるという視点をもって活用したい。

また、今後の授業において、学生・教員ともに、

評価〈4、5〉の上位項目、即ち、比較的に自学により達成が容易である学修内容については、主に学生の自主性に依ることができる。評価〈4、5〉の下位項目、即ち、学生・教員ともに重要だと考え、総合評価に影響を与えている、発声全般（特に学生は、声の響きを含む声のクオリティに関わる技能）や表現については、特にファシリテーターの役を担う教員が、援助していく必要のある学修内容であることが分かった。歌唱の必須技能である発声法は、そのメカニズムが身体内部で行われ、直接確認できないため、理論のみでは達成が困難である。学生が良いシステムの発声を体得するよう援助する必要がある。

４．おわりに

主体的な学修と新学習指導要領の３つの柱に基づいて、教員養成課程における声楽実技のためのルーブリックを作成した。このルーブリックを用いた声楽指導を、少人数の学生と、一斉授業に対し行った。授業終了後、学生に、自己評価による13項目の５段階評価の設問と自由記述からなるアンケートを行った。少人数の学生に対するアンケート結果を分析し、一斉授業に反映させた。その結果、一斉授業において、声楽実技のためのルーブリックと評価アンケートを使用した声楽指導には、以下の効果があることが分かった。

１）ルーブリックを学修の目標と位置付けることにより、学修者は、学修の全体像や方向性を明確に把握することができ、学修の動機づけができる。
２）芸術の実技という主観的かつ抽象的な評価尺度を具体的に可視化することができる。
３）ルーブリックの評価尺度を教員と学生、また学生同士が共有することにより、共通の認識の下で、適切なフィードバックが行われ、学修効果が高まる。
４）評価尺度を共有した学修者は、協働学修により、自己評価とともに他者に対するメタ認知的な評価をすることとができる。これにより、知識・技能が定着し、指導法が身につく。
５）アンケートを用いて、自己評価による振り返りを行うことにより、自己の課題を明確に把握し、次の学修に反映させることができる。
６）同時に、評価アンケートを用いて、達成できたことを可視化することにより、自己効力感が高まり、モチベーションを高く保ち、主体的に学修に取り組むことができる。
７）教員は、評価アンケートを分析することにより、授業では確認することのできない学生の学修状況や傾向、課題を把握することができる。これを次の指導に、フィードバックすることができる。

以上のことから、本研究の教育実践では、ルーブリックの活用方法が分かった。授業では、主体的な学びと新学習指導要領に基づいて作成したルーブリックを学修の目標と位置付ける。これは、学修の動機づけとなる。また、学修者は自己評価アンケートを用いて振り返りを行う。さらに、これをフィードバックさせ、試行錯誤しながら主体的に課題に取り組む。教員は、学生の主体的な学修をファシリテーターとして援助する。○ルーブリックによる学修の動機づけ、○試行錯誤しながらの主体的な学修とファシリテーターによる援助、○評価アンケートによる振り返り、このサイクルがスパイラルに向上していくことで、新学習指導要領の３つの柱である知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度、が身についていく。これは、自分の力で、歌が上手くなる、即ち、自学自修の教育方法である。この授業方法は学生の自学自修として有効であることが分かった。

ルーブリックとその内容を細分化した評価アンケートを用いた声楽実技指導は、少人数の個人レッスンのみならず、一斉授業においても大変有効であることが明らかになった。今後は、アンケート結果を、さらに他の方法で検証したい。

参考・引用文献

１．諏訪才子（2018）「教員養成課程における声楽実技指導の実践研究～新学習指導要領に基づく

ルーブリックの作成と検証～」『東北女子大学紀要』第 57 号，pp.55-65.
2．中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」文部科学省 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf（参照日 2019/8/20）
3．中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（参照日 2019/9/20）
4．南　学（2007）「学生による授業評価への CS 分析の適用」『三重大学教育学部附属教育総合実践センター紀要』第 27 号，pp.29-34.
5．横溝聡子・磯部哲夫・南川肇・深谷登喜子（2018）「音楽科実技科目におけるルーブリック評価の導入」『郡山女子大学紀要』第 54 号，pp.179-194.